

### 3. 松江（鳥根県松江市）

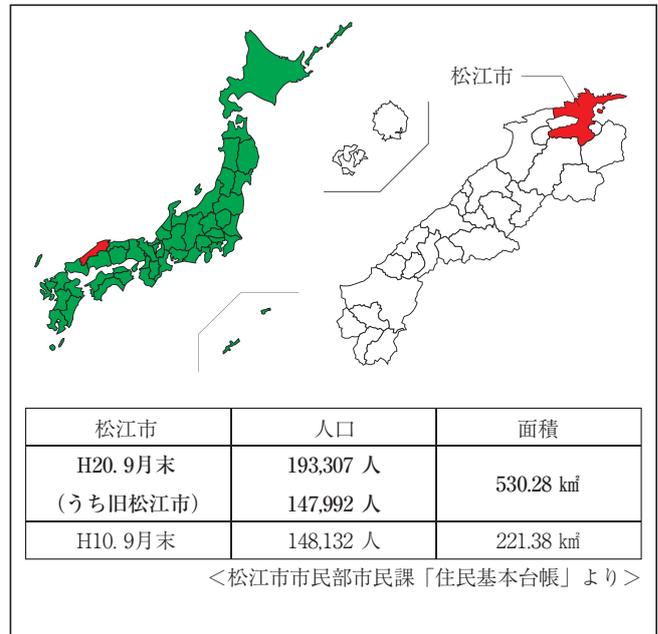
#### 社会

松江市は、鳥根県・鳥取県で構成される山陰地方の中央部に位置し、西に斐川町、出雲市、南に雲南市、安来市、東に東出雲町、鳥根県境港市と接し、北は日本海に面している。

松江市は、古代出雲の中心地として早くから開け、奈良時代には国庁や国分寺が置かれていた。「松江」という名は、慶長16年(1611年)に堀尾吉晴が亀田山に城を築き、白濁・末次の二郷をあわせて称したことに始まるといわれている。

明治4年(1871年)、廃藩置県によって県庁が置かれ、同22年(1889年)に市制が施行された。平成17年3月31日に、松江市、鹿島町、鳥根町、美保関町、八雲村、玉湯町、宍道町、八東町が合併し、新しい松江市となった。

特産物としては、全国一の漁獲高を誇る宍道湖産のヤマトシジミが有名である。



#### 自然

松江市は、宍道湖と中海を結ぶ大橋川によって、南北に市域が分かれている。北部には、大山隠岐国立公園に指定されている美しい海岸線と、大平山、三坂山、枕木山などからなる北山山系がある。一方南部には、星上山、天狗山、八雲山などからなる南部丘陵地が広がっている。

平成17年11月、宍道湖と中海が国際的に重要な湿地として、ラムサール条約に登録された。宍道湖と中海は、淡水と海水が混じる汽水湖という特有の湖沼で、宍道湖七珍と呼ばれるスズキ、モロゲエビ、ウナギ、アマサギ、シラウオ、コイ、シジミをはじめとするさまざまな生物が生息している。

松江市内には、目無水（大海崎町）、大井の池（大井町）、石橋の水（石橋町）、茶の湯の水（外中原町）、佐水の湧水（西忌部町）、意字の水源（八雲町）などの湧水がある。

松江市内の森林面積は27,623haで、森林率52%である。

#### 気候

松江市は、年平均気温が14.6℃、年間降水量が1,799.4mmであり、特に夏と冬の降水量が多い。

#### 風土

松江市は、松江城を中心とした城下町で、伝統的な風情を街並みに残している。松江城を囲む堀川沿いには、武家屋敷や老松の大木が残され、なかでも「塩見縄手」は、市の伝統美観地区に指定されている。

昭和26年、「明媚な風光とわが国の歴史、文化などの正しい理解のために欠くことのできない多く



## 取り組みの概要（目的・効果など）

- ・鳥根県環境政策課は、「五感指標による宍道湖・中海湖沼環境モニター調査」を市民参加の形で継続的に実施してきた。この調査は、市民と宍道湖・中海との距離を近づけ、湖沼環境に関心を高める効果を上げるとともに、汽水研究の第一人者からも、科学的な調査よりも実感的で正確な面も持つと高く評価されている。
- ・松江市が主催する「こども塾」では、松江の町を豊かな感覚的描写で書いた小説家・小泉八雲の感覚を追体験することをテーマとして、小説に出てくる松江の各場所を子供たちが訪ね、聴覚、視覚、味覚を使ってまちを体感する活動を活発に行っている。
- ・NPO法人まちづくりネットワーク鳥根は、宍道湖の水環境を体感するイベントとして、毎年夏に「嫁ヶ島に歩いて渡ろう」を開催している。

## 「感覚環境のまちづくり」から見た特色・魅力

- ・鳥根県環境政策課では、水質の測定結果が一般の人には意味が分かりにくいいため、人間の感覚をものさしにしながら、湖の環境状態を評価できないかと考えた。そして、市民との話し合いを重ね、人間の感性を使って環境の状態を測定する「五感指標によるモニター調査」を作り上げた。
- ・「下駄の音を響かせて橋を渡る」、「宍道湖の夕日を観察する」など、小泉八雲の小説のシーンを実際に子どもたちが体験する取り組みは、地域の風土・歴史・自然環境への身体感覚による理解を促進し、教育効果も高めている。
- ・「嫁ヶ島に歩いて渡ろう」は、自分が暮らしている場所の自然環境の価値や魅力を感じることで、環境の大切さや意味を知ることに通じるとともに、ふるさとの原体験になるという発想で始められた。
- ・宍道湖の調査など、土地の風土や文化に身体や感覚を使って直に触れる経験を通じ、地域の人々の環境保全への意識が育っている。

## 今後の課題・展望

- ・宍道湖・中海で取り組まれている「五感を使ったモニター調査」のように五感を使った手法が、湖沼環境以外の調査にも用いられ、また、広く全国各地で応用されることが、感覚環境のまちづくりの推進につながると期待される。
- ・「こども塾」、「まちづくりネットワーク鳥根」等の体験を通じて培った力をもとに、地元の風土や文化を理解し、いきいきと解説できる人材の育成が期待されている。

「感覚環境のまちづくり」を訪ねて - 3

## 湖沼環境を「五感」で体感する

### 「五感モニター調査」に潜む可能性

高度経済成長期に作られた第一世代の都市から、環境共生型の第二世代の都市とまちづくりへ。全国各地の都市とまちが更新される時代を迎えた今、「感覚環境のまちづくり」という新しい「まちづくり」の理念を作りあげていくための道程が、環境省から提案されようとしている。

新しい理念を創造していくにあたって大切にすべきポイントは、その土地に暮らす人々の「五感/感覚」を使った直接的な体験や検証が、「まちづくり」のランドデザインを描いていく重要な素材になる、ということだった。

では、五感や感覚を、「感覚環境のまちづくり」を推進していくための有用な「道具=ものさし」としていくには、全国各地のまちづくりの現場において、どのような活用方法が考えられるのだろうか？

「五感/感覚」をセンサーとして活用して湖沼環境をモニターしている、島根県松江市と宍道湖<sup>しんじこ</sup>の事例を訪ねた。

湖に沈む夕日が美しい。

ゆったりと水をたたえた湖面は、風の力でかすかに表面がざわめいている。

ほんやりと霞む空気。背後には、やわらかな山の稜線。湖の上に大きく開ける視界のすがすがしさと、やさしい山に包み込まれる安堵感。その両方が溶け合った絶景。

私は今、島根県松江市・宍道湖の湖畔に立っている。日本一美しい夕日風景としても名を馳せる景勝地だ。

平成 17 年、宍道湖・中海<sup>なかうみ</sup>はラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）に登録され、世界的にも重要な湿地としてその環境的価値が再認識された。

全国 5 位と 6 位、という大きな面積を有する宍道湖・中海は、淡水と海水が混じる「汽水湖」だ。そうした特有の環境を求めて、白鳥などの野鳥が渡来する。また、日本一の漁獲量を誇るヤマトシジミ、ワカサギやハゼ、スズキなど、多様な魚介類が生息する生物の楽園でもある。

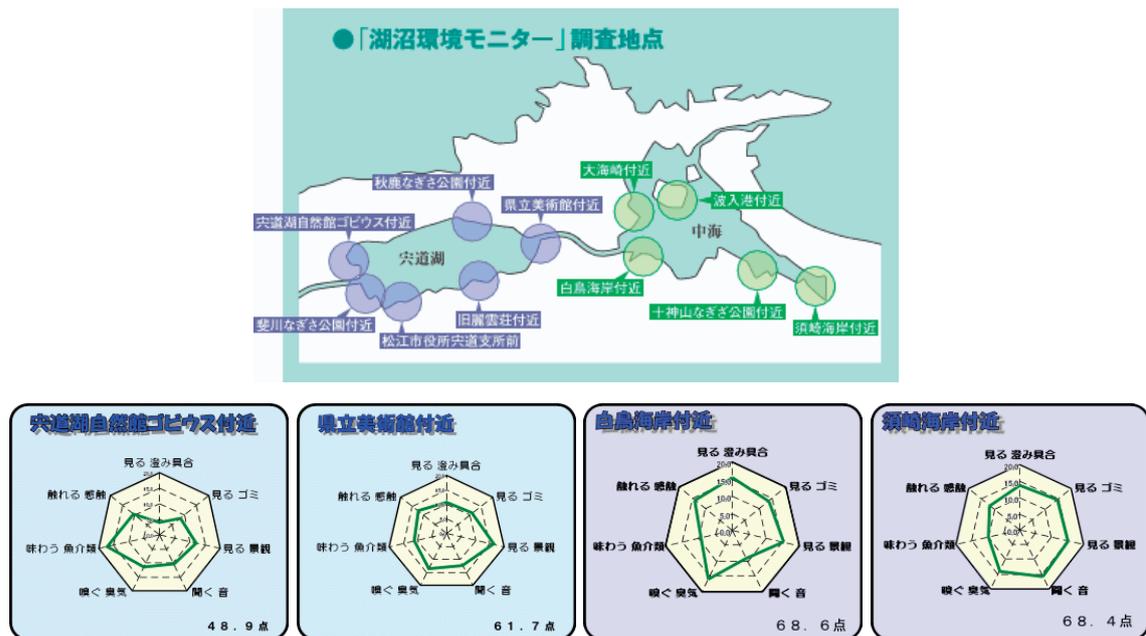
この宍道湖・中海は、従来から COD（化学的酸素要求量）や窒素、リンなどを測定する調査手法によって水質が調べられてきた。

「しかし、こうした調査によってデータ数値をいくら並べてみても、一般の人には意味がわかりにくい。人間の感覚によって、湖の環境状態を評価できないだろうかと思ったのです」と、島根県環境政策課の安部克也さんは「五感指標による宍道湖・中海湖沼環境モニター調査（以下、「五感モニター調査」）」を見せてくれた。

調査は、湖沼の環境を、人の五感 — 見る・聞く・嗅ぐ・味わう・触れる — の各項目で評価する。湖水の澄み具合・ゴミ・景観・音・臭気・魚介類・湖水の感触という 7 つの項目を採点し、その合計



宍道湖のシジミ漁



五感モニター調査地点及び地点別平均点・観察項目別グラフ（平成 18.10～平成 19.9）の例<sup>\*7</sup>

点によって湖沼環境をA・B・Cとランク付けする。

水だけではなく、周囲の様子も含めた総合的な湖沼環境の評価の目安として、現在、中海で5地点、宍道湖で6地点、計11地点で調査が進められている。16名の市民モニターと玉湯中学校、下意東子どもエコクラブの2団体が月一回、「五感による評価」を継続中だ。

調査は平成16年度からスタートし、二年間の調査の結果は（図2, 3）、「年間を平均すると宍道湖・中海ともに合計点数はBランク。気になる点もあるが、まずまず良好な環境である、という結果が出ています」（安部氏）という。

モニターに参加している市民の一人、犬山良さんは、「昔は湖で泳いだり、遊んだ思い出があるけれど、最近は汚いというイメージが広がって、湖と住人との距離が遠くなってしまいました。でも、五感モニターに参加してから私は、必ず靴をぬいで、裸足で水に触るようになりましたし、四季を通じて野鳥や生き物の変化に気づくようにもなりました。空を見上げて、雲が速いスピードで変化していく面白さも知ったしね。湖沼の環境調査は、楽しいですよ」と語ってくれた（P.29表3）。

## 人々と湖との距離を近づける「五感モニター調査」

参加している住民には楽しさを提供している「五感モニター調査」だが、専門家の目には、どのように映っているのだろうか？

「一般的には、地域の人々の関心がなくなると環境状態も悪化する、ということが言われています。市民の湖沼環境に対する関心を高めるといっても、五感モニター調査の意義は深いと思います」と、島根大学汽水域研究センターの國井秀伸センター長は言う。

科学的な水質調査は、これまで湖についての客観的な問題点を、数字によって明らかにしてくれた。だが一方で、科学的データは、ややもすると「数字で環境を見る」といった湖への接し方を生んでしまいかねない。湖と人との本来の親和性が、科学的な調査を介在させることで、薄れてしまったとし

\* 7～9 島根県環境生活部環境政策課

五感	観察項目	選択肢	判断対象の例	点数	点数
見る	湖水の澄み具合	澄んでいる (20点)	水の透明感、色、アオコ、赤蘆など	10.6 点	10.0 点
		少しにごっている (10点)			
		にごっている (0点)			
	ゴミ	ほとんどない (20点)	水面や湖畔に見当たるゴミなど	12.4 点	11.7 点
		少し見当たる (10点)			
		たくさんある (0点)			
景観	美しい心がなごむ・風情がある (10点)	周囲の山並みや建物、朝日・夕日、シジミ漁の風景など	7.3 点	7.1 点	
	特に感じることはない (5点)				
	殺風景・見通しが悪い (0点)				
聞く	音	ここよく感じる音・静かで落ち着く (10点)	鳥の鳴き声、さざ道の音、近くの寺の鐘の音、船艇の音、車の音、工場の音など	6.0 点	5.3 点
		特に気にならない音 (5点)			
		うるさく感じる音 (0点)			
嗅ぐ	臭気	ここよい香り・臭いはない (20点)	湖の香り、木や草花の香り、排気ガスの臭い、煙の臭い、ヘドロ臭など	13.2 点	12.3 点
		特に気にならない臭い (10点)			
		くさく感じる (0点)			
味わう	魚介類	食べてみたい (10点)	シジミやアサリなど宍道湖・中海でとれる魚介類	6.5 点	5.9 点
		どちらでもない (5点)			
		食べてみたいと思わない (0点)			
触れる	湖水の触感	触ってみたい (10点)	手や足を湖水につけてみたいかどうか	6.6 点	6.2 点
		触ることに少し抵抗がある (5点)			
		触りたくない (0点)			

■五感による湖沼環境ランク表

合計点数	ランク	評価内容
80点以上	A	おおむね良好で親しみやすい環境にあると感じられる
60点~79点	B	やや気になる面があるが、まずまず良好な環境であると感じられる
49点以下	C	快適さに欠け、親しみにくい環境にあると感じられる

合計	合計
62.7	58.6
点	点

※端数処理の関係上、各項目の合計と合計点が一致しないことがある。

図2 宍道湖の五感モニター調査結果 (H17.10 ~ H18.9(左) 及び H18.10 ~ H19.9(右)) \*8

五感	観察項目	選択肢	判断対象の例	点数	点数
見る	湖水の澄み具合	澄んでいる (20点)	水の透明感、色、アオコ、赤蘆など	11.4 点	15.2 点
		少しにごっている (10点)			
		にごっている (0点)			
	ゴミ	ほとんどない (20点)	水面や湖畔に見当たるゴミなど	12.7 点	14.5 点
		少し見当たる (10点)			
		たくさんある (0点)			
景観	美しい心がなごむ・風情がある (10点)	周囲の山並みや建物、朝日・夕日、シジミ漁の風景など	7.5 点	8.4 点	
	特に感じることはない (5点)				
	殺風景・見通しが悪い (0点)				
聞く	音	ここよく感じる音・静かで落ち着く (10点)	鳥の鳴き声、さざ道の音、近くの寺の鐘の音、船艇の音、車の音、工場の音など	7.8 点	7.4 点
		特に気にならない音 (5点)			
		うるさく感じる音 (0点)			
嗅ぐ	臭気	ここよい香り・臭いはない (20点)	湖の香り、木や草花の香り、排気ガスの臭い、煙の臭い、ヘドロ臭など	13.8 点	16.2 点
		特に気にならない臭い (10点)			
		くさく感じる (0点)			
味わう	魚介類	食べてみたい (10点)	シジミやアサリなど宍道湖・中海でとれる魚介類	4.9 点	5.7 点
		どちらでもない (5点)			
		食べてみたいと思わない (0点)			
触れる	湖水の触感	触ってみたい (10点)	手や足を湖水につけてみたいかどうか	6.3 点	7.4 点
		触ることに少し抵抗がある (5点)			
		触りたくない (0点)			

■五感による湖沼環境ランク表

合計点数	ランク	評価内容
80点以上	A	おおむね良好で親しみやすい環境にあると感じられる
60点~79点	B	やや気になる面があるが、まずまず良好な環境であると感じられる
49点以下	C	快適さに欠け、親しみにくい環境にあると感じられる

合計	合計
64.2	74.8
点	点

※端数処理の関係上、各項目の合計と合計点が一致しないことがある。

図3 中海の五感モニター調査結果 (H17.10 ~ H18.9(左) 及び H18.10 ~ H19.9(右)) \*9

表3 湖沼環境モニターの声（抜粋）

【宍道湖】	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 初めてこのようなことをするが、じっくり眺めると鴨が泳いでいたり小魚が飛び跳ねたりと、新しい発見がある。(10月)</li> <li>● 自動車の音、漂うゴミが非常に気になる。(10月)</li> <li>● 比較的水が透きとおりで、対岸の景色もよく見え、親しみを感じた。(10月)</li> <li>● 飛行機の爆音が野鳥の声を押しつぶし、望むべくもない。(10月)</li> <li>● 湖水が濁っている。しかし、水鳥たちが飛来し、冬が近づいてきたのを感じることができる。(11月)</li> <li>● 波浪の影響か漂着ゴミが目立つ。(11月)</li> <li>● この場所の湖水はいつも「泥水」のような色をしている。(11月)</li> <li>● 宍道湖の夕日は大変美しいが、朝日も綺麗である。ゴミ袋持参で清掃している初老の方がおられ、頭が下がる思いだった。(12月)</li> <li>● 湖岸の葦に漂着ゴミが無数に……。護岸整備されたところにはゴミはない。葦の植栽も良いが、その後の定期清掃やゴミ対策も一緒に実施するような「事後のケア」も視点に入れた活動であってほしい。(12月)</li> <li>● 荒天の日が多く、なかなか調査できなかった。やっとできた調査も湖水が濁っていた。非常に気になった。(1月)</li> <li>● 水位が先月より10cmくらい低くなっていた。浮遊物多数。(1月)</li> <li>● 白波が打ち寄せているわりには湖水は濁っていない。(1月)</li> <li>● 釣り人や散策する人も見かけない。心地良いといえばコハクチョウの鳴き声くらいか。北西の季節風が陸のゴミを吹き飛ばす。こうして葦の陰に累積していくのであろう。(1月)</li> </ul>
【中海】	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 調査地点を定期的に清掃する人がいた。頭が下がる思いがした。(10月)</li> <li>● 想像以上に水が澄んでいた。足でもつけてみようかなと思った。(10月)</li> <li>● 大山も綺麗に見え、すばらしい景観に癒される思いだが、鉄鋼団地の煙突の煙が景観を損ねている。(10月)</li> <li>● 湖というより海を感じるほどの潮の匂いがしていた。(10月)</li> <li>● 調査地点付近は湖水が褐色だった。これが赤潮なのか。(11月)</li> <li>● 水鳥は多くなってきたが水は濁っている。多少腐敗臭もする。貝殻が多く打ち上げられていた。これが臭うのか。(11月)</li> <li>● よく見かけたモエビやカニ等の甲殻類を見なくなった。(12月)</li> <li>● 潮の匂いがしたが、イヤな臭いではなかった。(12月)</li> <li>● 雨が降った後の湖水は特に濁っているようだ。原因を追及する必要があるのではないかと感じた。(12月)</li> <li>● 水鳥は多少いたが散策する人影はない。湖水も泡立っており、冬の中海は親しみにくいのかなと感じた。(1月)</li> <li>● 水辺の岩肌にかきの稚貝がびっしり付いている。藻（アサオ）が湖底で揺らいでいた。昔の赤貝のいた頃の中海に戻ることができるのであろうか。自助努力は当然必要だが、行政の努力も最大限に期待したい。昔の中海に戻るまで待ってみたい。(1月)</li> </ul>

たら・・・。

「五感モニター調査」は、遠くなってしまった湖と人との関係を、あらためて近づけていくきっかけになったのかもしれない。

「意義はそれだけにとどまらないんです」と國井センター長は続けた。

「窒素やリンを機械的に計測して、数値が多いとすぐに富栄養化だ、環境が悪化している、と判断しがちですね。だが、本当にそうでしょうか？昔から宍道湖・中海は、透明度は高いが窒素やリンが少なかったわけではありません。魚介類がたくさんいる、ということは、栄養としての窒素やリンなどがもともと豊富だったということでもある。数値だけで判断できない要素もあるのです。手で触って、匂いを嗅いで、目で観察するということは、いわば感覚を働かせて湖の健康診断をしているといえるでしょう。アオコや赤潮が出た時は、わざわざ数値を測らなくても視覚を使って観察すれば十分わかるし、透明度のモニターにも有効です。最近は環境保全の現場でも、水の色を目で見てモニターするための道具『水色表』の活用が見直されているんです」

現在取り組まれている調査の指標に対して、國井センター長は、さらにこんな提案をつけ加えた。

「欲を言えば、たとえば指標生物というものを決めて、定期的に海草、魚などの増減を目でチェックする、といった項目を加えてはどうでしょうか。生物の変化は、その場所の環境変化をダイレクトに映し出すからです。10年20年と継続的に続けていけば、たいへん意味のあるデータになると思います」

汽水研究の第一人者からも高く評価され、今後の取り組みが期待される「五感モニター調査」。だが、こうした調査を県が率先して推進するという事例は、全国的にも珍しいことだろう。

そもそも、スタートするきっかけは何だったのだろうか？

平成9年、「指標」作りを実施するにあたって、当時、県環境政策課で事業を担当した湊直樹さんはこう振り返る。

「まずは指標そのものをどう設定するか、そのための材料を集めていく調査から始まりました」

湖沼環境についての実地調査を重ね、市民と県担当者との意見を述べあい、その中から具体的な「指標」が練り上げられていった。

「人間の感性を使って環境の状態を、参加者が同じように測定することのできる指標を作るのに、かなりの時間がかかりました。例えば、『人間の感覚で、風力を測るにはどうしたらよいのか』、『小枝が揺れたら風速はどれくらいか』といった内容について話し合いを重ね、指標を定めていきました。波の状態を測るのに6階級にわけて評価したりと、一つ一つの指標をどのように表現したらいいのか、考えていったわけです」

当時の調査の様子が見えるメモが残っている。

「湖の色は各地点間でバラツキがある。今後レベル合わせの必要があり。検討の余地あり」

「透明度について、当日の風向き・風力は南西の風で、5カ所のポイントで巻き上げが起こらないため透明度は高い。反対に4カ所は巻き上げがあり、水は濁る」

「前日雨が降り、中之島地内の湯や川から流出したと思われるナイロン袋等が浮いていた。一度雨が降ると川に捨てられていたゴミは宍道湖に流入し、湖底に沈みあるいは岸に流れ着く。昔から川に捨てればよいと思っている。それでは地球はゴミ捨て場。私たち一人ひとりが自分の台所と思い、心してきれいにしたいと思う」

「沖の方で小鷺が何かを見つけたのか空中で羽ばたいている。浜では大鷺が3羽、餌をついばんでいる。『あっカワセミだ!』西の方より東に青白い光のように美しい色が飛んでいく。鷺も防波堤の電柱に2羽止まっている」

「大量のアオコが湖岸 10m 位にわたり一面にうち寄せ、水が緑に染まっている。日毎に秋も深まり、早朝には渡り鳥が鳴きながら飛来し、宍道湖をにぎわす。今日は特に風もなく温暖でのどかで安らぎを感じる。ただアオコの大発生が残念」

このようにして、約 30 名の市民が参加し、五感・感覚を使って宍道湖・中海の 40 ヶ所を週一度、調査する試みを地道に重ねていった。その結果を分析し、指標の絞り込みなどの作業が行われて、平成 11 年度にやっと「指標」が完成した。その後しばらくの普及期間を経て、平成 16 年度からこうした指標を活用した調査が始まった。

### 小泉八雲から教わる、松江の感覚環境

「五感/感覚」に心地よいまちづくりを進めていく取り組みが、21 世紀に生きる私たちにとって、ますます大切な課題として浮上しつつある。だが実は、今から 100 年も前に、この松江で、五感を豊かに働かせながら仕事をしていた人がいた。

木の橋を、下駄で歩く。はたして、どんな音が響くだろうか。

怪談「子育て幽霊」が伝わる古い寺で、琥珀色の水飴を舐めたら、どんな味がするだろうか。

「小泉八雲の感覚を追体験する」。そんなテーマで「子ども塾」が開催された。小学 5 年生～中学 2 年生の 20 人ほどが、八雲ゆかりの地を訪ねて、五感を使って一つ一つ、感じる体験を重ねていった。

「小泉八雲没後 100 年の節目に、松江でしか取り組めないイベントを実現しようと考えました」と、「子ども塾」塾長で、小泉八雲の孫でもある鳥根県立女子短期大学の小泉凡准教授は言う。

「子どもたちには、知識を深めることよりも、感覚を開き、八雲が愛した松江の町や自然を感じなおしてほしい、と思ったのです。八雲は 16 歳で左目が見えなくなり、右目もかなり視力が悪かったんです。ただその分、視覚以外の感覚で、細やかに日本の都市空間や街並みを感じとり、描き出していったのではないかと、思うからです」

たしかに、松江を描いた八雲の文章を紐解くと

「禅宗の洞光寺の大釣鐘がゴーン、ゴーンという音を町の空に響かせる。次に私の住む家に近い材木町の小さな地藏堂から朝の勤行の時刻を知らせる太鼓の物悲しい響きが聞こえてくる。そして最後には朝一番早い物売りの呼び声が始まる。『大根やい、蕪や蕪』と大根のほか見慣れぬ野菜類を売る者……」（『知られぬ日本の面影』）

音だけではない。たとえば宍道湖の描写は「藍色とも黒ともつかぬ姿の背後から上空にかけて、くすんだ濃い紫の靄が幅広くたなびき…」といった調子で、低下した視力でよくここまで観察できたなど驚かされるほど、徹底した感覚による観察が記述されていく。

八雲の怪談の世界が幼い子どもにとって怖かったのは、音風景や気配、触覚といった身体感覚に働きかける、細やかな描写が豊かだったせいなのだ、と今さらながら気づかされる。

「子ども塾」は平成 16 年にスタートした。平成 19 年の夏は、八雲が好きだった鳥根半島・美保神社で合宿をし、地元の民話を聞いたと言う。

「ゆくゆくは、八雲の気持ちができる『子ども学芸員』として、地元の風土や文化をしっかりと解



小泉八雲記念館

説できる人材として活躍してもらいたい。夢は膨らみます。市の観光文化振興課が事務局としてサポートしてくれていますし、『子ども塾』の経験を、松江のまちづくりや文化観光に活かしていきたいですね」(小泉氏)

## 直接体験を通して、まちづくりを考える時代

「五感/感覚」を、「まちづくり」を進めていく道具として活用することができれば、以下のような三つの道筋が見えてくるのではないだろうか。

その三つとは —

### (1) 「まち」の魅力が発見されること

「心地よい」暮らしを実現していく「まちづくり」を進めていくにあたって、その「まち」の固有性・歴史性・風土・伝統・文化など「まち」に眠る数々の魅力は、「五感/感覚」を使って「まち」を観察することによって、発見されていくのではないか。そこから「感覚環境のまちづくり」はスタートするのではないか。

### (2) 「つながり」が創られていくこと

「まち」の新しい魅力を発見していく取り組みを積み重ねていくことによって、土地と住民との関係がつなぎ直されていくと同時に、同じ地域で共に生活している人々同士のつながりが、「五感/感覚」体験を共有する中から生まれてくるのではないか。

### (3) 未来に伝えられていくこと

「まちづくり」の目標がどのように達成され維持されているのかを、「五感/感覚」を働かせて検証していく方法を確立することができれば、新しい「まち」の魅力を、未来へと伝えていくことができるのではないか。

この三つの道筋が、「感覚環境のまちづくり」を進めていくことで開かれていく可能性であると、私には感じられたのだった。

大切なことは、誰かがまとめあげた数字や計画に依存することなく、その「まち」で暮らしている一人一人の個人と「まち」の環境との、体感を通した直接的な対話から、「まちづくり」について考えていくという姿勢だろう。

松江では、湖沼の環境調査以外にも、宍道湖を身体や感覚で感じる楽しいイベントが、住民によって開催されている。

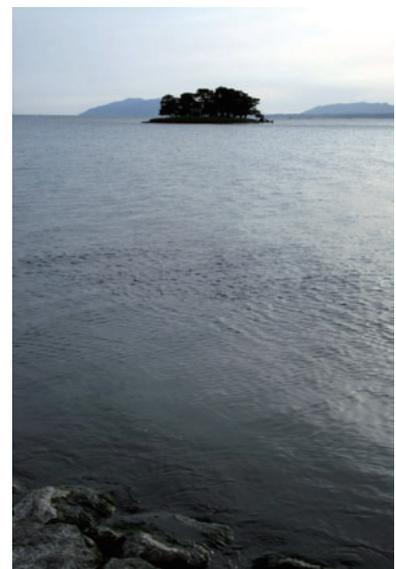
松江の市民で作る NPO 法人まちづくりネットワーク島根は、毎年夏がやってくると、「嫁ヶ島に歩いて渡ろう」というイベントを開いている。

身近にありながらも、日常生活の中では接する機会がなくなってしまった宍道湖。その水の中に入って、湖岸から沖へと歩いて、嫁ヶ島へと渡るイベントだ。

嫁ヶ島は、宍道湖の東岸にあり、国道 9 号線から沖合い 220 メートル先に浮ぶ、宍道湖では唯一の島だ。

平成 18 年には、幼児から 80 歳代まで、約 300 人が参加した。

「テーマは、水環境を自分の体で体感することなんです。自分が暮らしている場所の自然環境の価値や魅力を、まず地域の人を感じなければ、何も先に進みません。湖の中に入って歩くと



宍道湖に浮かぶ嫁ヶ島

---

いう体験は、環境の大切さや意味を知ることに通じていくはずですし、何よりも子どもたちにとって、貴重なふるさとの原体験になるのではないのでしょうか」と同ネットワークの松本修宗さんは言う。

平成19年8月も同じイベントが開催された。参加者は年々増加し、この時期にあわせて、東京や大阪から松江へ帰京する親子も多い、という。

科学的な数値から、「五感／感覚」を使った調査へ。

目で見える景観だけでなく、直接的な体感へ。

環境の価値を、人の感覚や実感へと置き換えていく作業は一見、単純に見える。だが、「五感／感覚」に基づいた環境評価は、自然環境を再生し、豊かな生活環境を持続していく指標作りの源として、みごとに役立っていた。

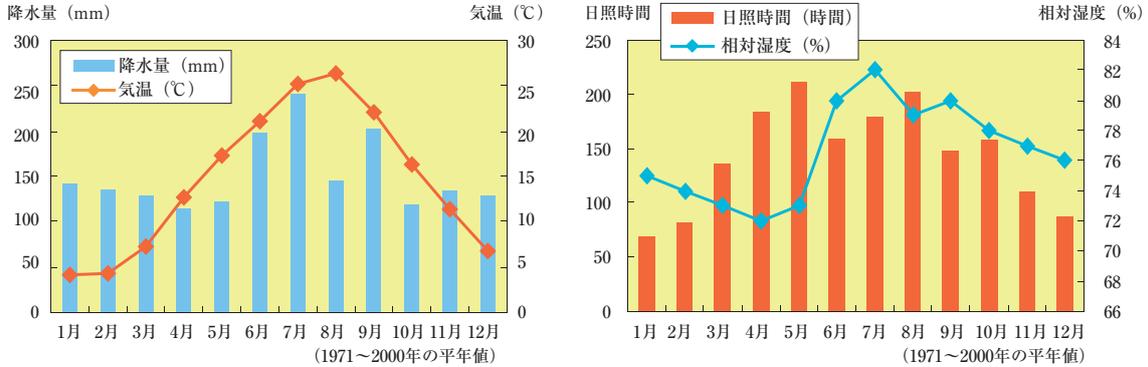
こうした「五感／感覚」を活用した「環境評価指標」が、様々な街並みや自然環境に対応して創られていった時、「感覚環境のまちづくり」を推進していくためのランドデザインは、さらに鮮明に描かれていくことだろう。

「感覚環境のまちづくり」事例調査を通して、まず感じたのは、そのことだった。

---

## 参考資料

### 気温・降水量・日照時間・湿度



<気象庁データより作成>

### 大気状況

国設松江大気環境測定所の年平均値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
二酸化硫黄 (ppm)	0.002	0.002	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
二酸化窒素 (ppm)	0.005	0.006	0.006	0.005	0.005	0.005	0.005	0.004	0.004	0.004
浮遊粒子状物質 (mg/m <sup>3</sup> )	0.018	0.019	0.019	0.018	0.020	0.019	0.021	0.021	0.023	0.021

<松江環境保全部環境保全課>

### 水質状況

生物化学的酸素要求量 (BOD) 年間75%値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
朝酌川全域 (mg/l)	-	2.9	3.5	3.9	5.2	1.8	1.6	4.1	2.0	1.8
山居川全域 (mg/l)	-	6.7	5.4	3.6	5.0	2.0	2.4	3.0	2.4	2.6
馬橋川全域 (mg/l)	-	5.7	5.0	3.2	4.0	2.0	2.4	1.7	1.9	1.4
忌部川上流 (mg/l)	-	1.4	1.5	1.2	1.3	1.0	1.1	1.5	1.1	2.0
忌部川下流 (mg/l)	-	1.6	1.9	0.9	1.3	1.3	1.0	0.9	1.0	1.6

H10の集計データなし

<松江環境保全部環境保全課>

### 公害苦情

(件数)

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
大気汚染	21	12	-	67	20	32	26	10	22	14
水質汚濁	3	5	-	2	4	2	0	4	1	3
騒音	2	4	-	6	6	11	3	20	14	17
振動	0	0	-	3	0	0	1	1	1	4
悪臭	9	4	-	31	5	10	4	1	6	6
土壌汚染	0	1	-	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	-	3	0	19	23	0	0	8
総数	35	26	-	112	35	74	57	36	44	52

H12のみ集計データなし

<松江環境保全部環境保全課>